



夏目漱石の病歴と生活（二）

広島文化学園大学大学院看護学研究科
森下 恭光

■ 緒言

本稿の主題は前稿に引きつづき、夏目の健康状態がその生活にいかなる影響及ぼしたかを明らかにすることにある。前稿では主として消化器系の病気についてその病歴を明治三十六年の時点までについて明らかにし、それが生活に及ぼした影響も記述した。同時に神経系の病気についても相当の紙数を費やすことになったが、消化器系の病気と異なり病歴を明らかにすることができなかつた点を補うべく、その発端にまで遡り病歴を明らかにして行きたい。考察の資料としては、夏目自身が記した資料（主として書簡・日記等）の他に他者（主として家族・友人・門下生等）による談話等の資料が主なるものとなる。病歴については、消化器系のそれと異なり資料が主観性を帯びることを予想せざるを得ない。

■ 夏目の神経系の病歴の端緒

夏目の病歴について探求することの意味は、職業人としては教職者に始まり、職業的作家としてその生涯を終えた夏目の特性と病歴が深いかわりを持ってくると考えられることにある。前稿につづく本稿は、夏目の病歴の中より神経系の病歴に焦点を絞って論述する。

前稿において、夏目の病歴を調べる手懸りの有力な資料として、夏目の遺体の解剖を執刀した長与又郎（東京帝国大学医科大学病理解剖学第二講座担当）が後日行った「夏目漱石氏剖検（標本供覧）」と題する講演の冒頭部分を引用した。そこには、解剖の目的が二つあり、一つは脳を研究すること。もう一つは消化系統を調べることにあったことが述べられている。この二つの目的の中で、消化系統については精密な分析がなされているので、それに依拠しながら前稿においては相当部分の論述を進めることができた。しかし、もう一つの目的になっている脳の研究の方は、長与自身、講演の終末の部分で「脳ニ関スル研究ハ今日マダシテ居リマセンデ、是ハ何ゾレ詳シク調ベタ上デ適当ナ方面ニ於テ報告スル積リ」¹⁾であることを言い添えている。このことにある通り、消化器系統の病歴を調べるのに比して、脳に関係する夏目の病歴を調べることには困難が伴う。ただ、同講演の中で、夏目の脳の特徴に触れた部分があり、「夏目サンノ脳ハソノ重量ニ於テハ左程著シク平均数ヲ超過シテ居リマセヌガ廻転ハドウモ非常ニ能ク発達シテ居ル、殊ニ左右ノ前頭葉ト顱頂部ガ発達シテ居ル」²⁾と述べられていることにも見られるとおり、夏目の脳については、多くの論議がなされて来た。このことについて、立川昭二は、その著書「病の人間史—明治・大正・昭和」において、夏目の脳を病跡学でいうと主なものをあげても十種の診断があると紹介している。

分裂病と躁鬱病との混合精神病、分裂病と躁鬱病との非定型精神病、分裂病と周期性精神病の混合型、分裂病圏内の病気、パラノイア（偏執病）、抑鬱＝偏執症候群、内因性鬱病、神経症圏内の病気、心因反応（広義の神経症）、同一性危機による精神障害³⁾。

主なものをあげても以上のように多様な診断がされているということは、それだけ診断という作業の

もりした やすみつ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学大学院看護学研究科

困難さを象徴していると言ってよい。

研究者の診断が多種多様であるのに対し、夏目自身は自己の精神状態をどのように把握していたのか。彼は自身の精神の状態が尋常の状態にないと意識する時、その状態をしばしば「神経衰弱」ということばで表現した。この神経衰弱という用語は、精神科医である千谷七郎によれば、「神経衰弱という呼称それ自体には医学的に明瞭な定義はあるにはあるが、通俗的に用いられている意味はそれとは異なって、今日の神経症のようなもので、その定義はかなり曖昧⁴⁾であるという。

ところで、夏目が自身の精神状態が尋常でないと意識することは、何時ごろから始まったのであろうか。精神状態が尋常でないと意識することを千谷の言う通俗的な意味での神経症（ノイローゼ）にまで拡大して考えると、それは桶谷秀昭によれば、明治二十三年にまで遡ることができる⁵⁾、という。この年八月九日、夏目は親友の正岡子規に宛てて長文の書簡を認めている。当時、夏目は第一高等中学校を卒業（七月）し、九月より帝国大学文科大学英文科への入学も決まっていた。そういう時期に、夏目は「此頃は何となく浮世がいやになり、どう考えても考え直してもいやでいやで立ち切れず去りとて自殺する程の勇氣もなきは矢張り人間らしき所が幾分あるせいならんか⁶⁾と自己の心境を告白していることをとり上げて、夏目の神経症の兆候をそこに見ているのである。通常の事例としては、この年齢（満23歳）で、卒業も進学先も決定している時期の心境としては例外に属するものと言ってよく、桶谷の見解は妥当であると言ってよい。この時期の心境を彼自身は神経衰弱という言葉を用いて表現してはいない。彼が用いているのは、同じ書簡の中で「misanthropic 病⁷⁾と云うのがそれに該当する。つまり、「厭世病」である。ここで指摘しておきたいのは、夏目は自身の心境を「厭世主義」という思想としてとらえるのではなく、「厭世病」という病気の症状としてとらえているということである。

■ 高等師範講師時代の夏目の苦悩

この後、夏目が神経衰弱を意識するのは、明治二十七年から明治二十八年にかけての約一年間である。精神科医の千谷七郎は、この時期の夏目の神経衰弱を内因性鬱病と診断している⁸⁾。千谷がこの時期の夏目が内因性鬱病を発病していたと推測する根拠は、夏目が正岡子規に宛てて出した書簡の内容にある。

明治二十七年九月四日付で夏目が正岡に宛てた書簡には、「元来小生の漂泊は此三四年來沸騰せる脳漿を冷却して尺寸の勉強心を振興せん為のみに御座候⁹⁾とあることを推測の資料としている。この時期、夏目は前年の明治二十六年七月に帝国大学文科大学英文科を卒業し、十月、文科大学学院長外山正一の推薦により東京高等師範学校英語教師に就任し、勤務先及び生活上に格別の問題をかかえていたわけではない。にもかかわらず何故夏目は彼のいう「此三四年來沸騰せる脳漿を冷却」する必要を感じていたのであろうか。松岡譲によれば、夏目が3年間学んだ英文学の意義を見付け出せず、その結果「英文学に欺かれたような不安にかられ¹⁰⁾ていたことにその原因があるとする。こういう所に夏目が通常の基準では測りにくい独特の性情がうかがえるのであり、その点が千谷の指摘するような内因性鬱病と診断される根拠ともなるのであろう。

この状況からの脱却を志し夏目を選んだ方法は参禅である。友人の菅虎雄の紹介で鎌倉円覚寺に釈宗活¹¹⁾を訪ね塔頭帰源院の正統院に入る。同院において宗活の手引で釈宗演¹²⁾の指導を受ける。夏目の記憶によればこの時与えられた公案は「父母未生以前本来の面目」の他に「趙州の無字」があった¹³⁾。石川悌二によれば、夏目が参禅したのは、「明治二十七年の十二月下旬から翌年一月七日まで¹⁴⁾の約2週間であった。その結果がどうであったかは、翌年の明治二十八年一月十日付で齊藤阿具に宛てた書簡に、「小子去冬より鎌倉の楞伽窟に参禅の為め帰源院と申す処に止宿致し旬日の間折脚鐘裏の粥にて飯袋を養い漸く一昨山下の上帰京仕候五百生の野狐禅遂に本来の面目を撥出し来らず御憫笑可被下候¹⁵⁾とあることによって明らかである。

夏目のこの時期における煩悶が強度のものであり、千谷のいう内因性鬱病といい得る程度のものであったとするならば、短期間での克服を目指したとまでは言えないにしても、効果を期待できる試みであったとは思われない。そこに見えて来るのは夏目の強い焦燥感である。

とはいえ、夏目の禅への傾斜は決して一過性のもではなかった。敢えて言うならば、彼の生涯にわたっ

て持続し、しかも深化していったものと推測される。夏目と禅とのかかわりを主題とする加藤二郎の「漱石と禅」には多数の資料を示しつつ、そこにあらわれている夏目の禅的資質と人生課題の関係が究明されている。加藤によれば、夏目と禅のかかわりの中核には「生死の超越」という言葉に集約される問題があったとされる¹⁶⁾。

ところで、夏目の参禅が高等師範学校で年450円、月給37円50銭の報酬を得ている¹⁷⁾ 現職の教師（講師）の立場で行われたものであることを考えると、勤務状況とこの事に関心を持たざるを得ない。

在職中の彼の教職についての意識は決して高いものでなかったことは、後に学習院輔仁会主催で行われた「私の個人主義」と題する講演の中で語られている。そこで、高等師範への就職が必ずしも本意によるものでなかったことを述べた上で「幸に語学の方は怪しいにせよ、何うか斯うか御茶を濁して行かれるから、其日々々はまあ無事に済んでいましたが腹の中は常に空虚でした。」¹⁸⁾と当時の心境を語り、「教育者であるという素因の私に欠乏している事は始めから知っていましたが、たゞ教場で英語を教える事が既に面倒なのだから仕方ありません。」¹⁹⁾とまで語っている。このような内容に話題が展開して行くのは、自己の本分は何であるか、すなわち、何をもちて社会に貢献すべきかを模索していた時期の自身の心境を率直に語ることに主意があることを考えるならば当然のことである。しかし、東京高等師範学校において英語教師として俸給を得ている身であることを考えれば、心境は心境として偽らざるものがあるにしても職務には精励すべきである、というのが一般的である。夏目は、職務や義務に忠実であり、誠実であろうとする性格的特性を持っていたことからすると、一般論通りを実行したであろう。その上、高等師範学校が高等教育機関であって、教育内容（このばあい英語）についての卓越した専門的知識と技術が具っていれば、教育者としての資質が問われることにならなかったことが背景にあり、夏目はその意味においては十分な資質を具えていたから職務を遂行する上では全く問題がなかったであろうことも推測される。

しかし、夏目が高等学校師範学校に勤務したのは明治二十六年十月から明治二十八年四月までの約一年半に過ぎない。就職の動機もさることながら、やはりこの時期の夏目の精神状態は尋常ではなかったということの一つの結果として理解するのが妥当であるように考えられる。

■ 平穩期における夏目

明治二十八年四月、夏目は一年半程勤務した東京高等師範学校を辞職して、愛媛県尋常中学校教諭として赴任する。専任の教諭としてで、月俸は80円であった²⁰⁾。突然の東京高等師範学校の辞職は、多くの憶測を生むことになるが、決定的理由とされるものは明らかにされていない。どれが主因と確定することができないということは、原因が複合的なものであると考えることもできる。その基調としての作用に、千谷の言う内因性鬱病が影響していたとも考えられる。

しかし、そのような経過を経て就任した愛媛県尋常中学校における勤務生活は、東京高等師範学校におけるそれと比較すれば平穩と言ってよいものであった。それを支える要因として、明治二十二年一月以来の親友であり生涯の友となる正岡子規が自身の郷里である松山に明治二十八年八月二十七日に帰って来、同年十月十九日迄の約2か月同居し、句作に熱中する時間を共有したという事実があげられる²¹⁾。それは精神面における平穩な日々をもたらした。夏目がいかに句作に熱中したかを示す事実として、荒正人によって、十月だけで88句、十二月までに240句ほど作句したことが明らかにされている²²⁾。

この年、夏目は見合いのため上京し、十二月二十八日、当時、貴族院書記官長をしていた中根重一の長女鏡子（十九歳）と見合いをする。結果は双方気に入る、鏡子の父親も夏目を高く評価し、婚約が成立する。この間の経緯は鏡子による「漱石の思ひ出」に詳細に語られている。その中で、とくに注目されるのは、鏡子の父が、貴族院書記官長という顯職にありながら地方の中学教師である夏目を娘の夫の候補者として認めたことである。鏡子の言葉によれば「官吏全盛の世の中に、中略、とにかく余りばつとしない中学教師風情に娘をやろうというからには、父にもよほど見るところがあったのでありましょ。う。」²³⁾ということであった。「中学教師風情」という用語に当時の特権階級の職業観が露骨にあらわれているが、それは父親の職業観でもあり、それを反映しての娘鏡子の職業観でもあった。

中根重一からすれば夏目の現在の中学校教師は一時的職業であって、帝大の英文科卒業の経歴によって将来性を期待できる人物であったということであろう。当初、夏目の東京勤務を望んでいた中根も、夏目が松山の中学から熊本の高等学校に移ることになると、敢えて東京にこだわることをせず、娘を熊本の第五高等学校教師となった夏目に嫁がせる。

こうして夏目は明治二十九年四月、愛媛尋常中学校を退職し、第五高等学校講師（月俸100円）に就任し、六月に鏡子と結婚する²⁴⁾。媒酌人は松方正義内閣の恩給局長井上廉がつとめる。そして、翌月七月九日には教授に昇進する。

結婚当初、夏目が妻の鏡子に言い渡した言葉、「俺は学者で勉強しなければならないのだから、お前なんかにかまっていられない。それは承知して貰いたい。」²⁵⁾に鏡子は、とくに驚かなかったとしながらも、新生活には相当の当惑のあったことを述懐している。

翌明治三十年六月二十九日、夏目の実父直克（81歳）死去。学年末試験中のため、七月に鏡子を伴い上京し、父の霊前に詣でる。上京中、すでに妊娠中であった鏡子が流産²⁶⁾し、鎌倉で保養する。夏目は、九月七日に東京を発つまでの約2か月を妻の見舞い、正岡子規訪問、鎌倉円覚寺帰源院に釈宗活を訪ねるなどして日を送る。熊本へ帰る際、妻を伴うべきか否かを医師に相談し、単身で帰ることに決する。これらのことから察するに、この時期の夏目には、肉体面、精神面でとくに問題は発生しなかったと考えられる。鏡子が熊本に帰るのは十月二十五日で、この時夏目は住所を移しており、第五高等学校学生が書生として住み込んでいた。また、当時学生であった寺田寅彦²⁷⁾（七月初めごろより夏目に接近）が俳句を作って夏目に批評を乞う為頻繁に出入りするようになっていた。これらのことから夏目が勤務先における人間関係や師弟関係において安定的位置を占めていたことが推測される。とくに、十月の末から十一月の末にかけて、福岡・佐賀両県下の主な中学校の英語授業を視察する命が下り、中学校視察のための出張がつづき、それを勤勉に実行していることを見ると、勤務面においても順調な生活が持続した時期であることがうかがえる。

翌明治三十一年は、鏡子の身に重大な事態が発生する。

この年三月末に夏目は市内井川淵町8番地に移る。熊本居住を始めてより5回目の引越しである。四月、山川信次郎らの友人と小天温泉に行く予定であったのを鏡子の体調不良を気遣い同行を取り止める。六月末か七月初め（日不詳）、早朝、鏡子は、自宅に近い白川に投身自殺を企てる。幸い舟で投網の漁に出ていた人物に救助され大事に至ることはなかった。

この事件は、元第五高等学校の同僚浅井栄熙の奔走で醜聞として伝播することには至らなかった²⁸⁾。自殺を企てた原因は明らかにされているわけでもなく、憶測の限りと言わざるを得ないものであるが、有力なものとしては、鏡子の持病ともいえるヒステリーによるとする説がある。小宮豊隆によれば、鏡子のヒステリーは悪阻の症状として明治二十九年九月頃にあらわれており、その猛烈さは「普通の女が癢を起す時によくするように、歯を食いしばって、仰むきに反っくり返って、ぶっ倒れたりするのだそうである。」²⁹⁾という程のものであったろう、と想像している。鏡子自身は投身自殺を企てたことには全く触れていないが、長女筆子の誕生について語った箇所自身悪阻について語っている。

「この秋（明治三十一年）私は妊娠しておりまして、猛烈な悪阻になやまされ続けました。それは九月から始まって十一月まで続き、一番ひどかった時などには、食べ物や薬はおろか水さえ咽喉に通らなかったくらい。」³⁰⁾であったと述懐している。この妊娠で生まれたのが長女筆子で、誕生日は、明治三十二年五月三十一日である。

これより前、明治三十一年十一月九日、夏目は勤務先の第五高等学校評議員に任命されている。職場では順調に業績をあげていたことがこのことにより確認できる。

住居は、井川淵町から内坪井町78番地に移っている（七月）。6回目の転居である。（この建物は現存し、有料で入館できる。）

翌明治三十二年は鏡子のヒステリーは二月ごろまで続くが、前述のとおり五月三十一日、長女筆子が誕生する。この時の夏目の様子を鏡子は次のように述懐する。「最初の子供ではあり、結婚してから満三年の後にできた子ではあり、ずいぶん可愛がりまして、自分でよく抱いたりいたしました。」³¹⁾

夏目自身の健康については、八月から九月上旬にかけて持病ともいべき胃病が発症しているが重症

ではない。この時期に夏目は友人山川信次郎と共に阿蘇へ赴く。八月二十九日から九月二日に至る小旅行で、戸下温泉、内牧温泉を訪ね宿泊している。休養が主目的といえるこの旅行は後に発表される「二百十日」³²⁾（明治三十九年十月発表）の素材となる。

■ ロンドン留学と夏目の神経

五月十二日、英語研究のため、文部省第一回給費留学生として満2か年イギリス留学を命じられる。現職のままで、年額1,800円の留学費の他に留守宅には休職給25円（年額300円）が支給される。但し、以上の額より製艦費2円50銭が差し引かれる³³⁾。

明治三十三年九月八日、夏目はプロイセン（Preussen）号に乗船し、英国留学の途につく。鏡子はこの日のことを「私たちは横浜まで見送りました。プロイセン号という外国船で、日本人の客とっては、芳賀さん藤代さん、それに夏目の三人でした。」³⁴⁾と回想している。

この時鏡子は二女恒子（明治三十四年一月二十六日誕生）を懐妊していたが、長女筆子のばあいと違い、悪阻やそれによるヒステリーのことは伝えられていない。そのことは留学する夏目にとっては懸念材料にならない分好ましいことであつたらう。航海中の夏目の体調については前稿で触れているので割愛するが、胃の不調を訴えつづけたことは記しておきたい。夏目がロンドンに到着し、異国の下宿に入ったのは十月二十八日であつたから横浜港を出発してから50日程経過していた。

早速、十一月七日より University College（ロンドン大学）のケア（William Paton Ker）教授の講義を聴講する。また、十一月二十七日よりケア教授より紹介されたクレイグ（William James Craig）博士（シェイクスピア研究家）の個人教授を受け始める³⁵⁾。留生活はこのように留学生本来の形で開始された。ケア教授の講義聴講は短期間で止めるが、クレイグ博士による個人教授は週1回（火曜）、1時間5シリングの契約で翌年八月頃まで私宅に通う。

ロンドンでの留生活が始まって約2か月が経過した十二月二十六日、夏目は鏡子に宛てて長文の書簡を送っている。元来、筆まめな夏目のことであるから、それまでに鏡子に宛てただけでも5通送っている。言うまでもなく誰に対するよりも頻繁で、しかも内容も細やかである。十月二十三日付書簡には、「其許懐妊中善々身体ヲ大事ニ可被成候筆モ随分気ヲ付ケテ御養育可被成候妊娠中ハ感情ヲ刺激スル様ナ小説杯ハ御止メ可被成候ノンキニ御暮シ可被成候」³⁶⁾と記し、妊娠中の妻に対する心遣い、長女筆子の養育についての注意など情愛豊かな夫、父としての側面を見せている。

そして、十二月二十六日付で鏡子に送った書簡は長文のものであるだけに内容は多岐にわたっている。中でも切実な気分が表明されているのは費用と健康に関する事で、「当地にては金のないのと病気になるのが一番心細く候病気は婦朝迄は謝絶する積なれど金のなきには閉口致候」³⁷⁾と彼独特の諧謔を交えながら実は切実な状況を訴えている。しかし、状況は妻に訴えても改善されるはずのものでないことを承知の上での訴えであるから、いわゆる愚痴の類である。そこに妻であるからこそ告げられるという夏目の心理が察せられる。それに対して子どもの養育に対する注文は意味が違って来る。先に引用した手紙同様に長女筆子の養育に対しては細々と注文している。「筆も丈夫に相成候よし何より結構の事に候可成我俣にならぬ様あまえぬ様可愛がりて無暗にあまき物杯やらぬ様無暗にすわらして足部の発達を妨げぬ様御注意可被成候」³⁸⁾と記すところにも遠隔地にあつて直接手を下し得ないもどかしさが伝わって来る。結局、この年明治三十三年には、2か月余りの間に夏目は鏡子宛に6通の書簡を送り、自身の体調の不調は訴えることはあつても深刻にならぬように気遣い、それをはるかに越える心遣いを鏡子や長女筆子に対して見せていることが深く印象される。

翌明治三十四年になると、夏目の心境に変化があらわれて来る事がその書簡の内容等によつてもうかがわれる。

二月二十日付に鏡子に宛てた手紙の冒頭に「国を出てから半年許りになる少々厭気になって帰り度なつた御前の手紙は2本来た許りだ其後の消息は分からない多分無事だろつと思つて居る御前でも子供でも死んだら電報位は来るだろつと思つて居る夫だから便りのないのは左程心配にはならない然し甚だ淋い」³⁹⁾と書く夏目には前年の書簡に見られるような余裕と相手を思いやる心遣いが影をひそめ、苛立ちさえ感

じさせるものがある。

さらに三月九日付の鏡子に宛てた書簡には「御前は産をしたのか子供は男か女か両方共丈夫なのかどうもさっぱり分らん遠国に居ると中々心配なものだ自分で書けなければ中根の御父さんか誰かに書いて貰うが好い」⁴⁰⁾と激しい調子で責めている。一月二十六日に次女恒子は無事に誕生しているのであるから、1月余り何の便りもないのは夏目でなくても心配は募るし、焦りや怒りが起こるのは無理もない。

したがって、この心境は異常とはいいい難く、鏡子の側で便りを出せば解決する問題である。

実際、五月八日付の夏目の書簡には「御前の手紙と中根の御母さんの手紙と筆の写真と御前の写真は五月二日に着いて皆拝見した／久々で写真を以て拝顔の栄を得たが不相変御兩人とも滑稽な顔をして居るに感服の至だ」⁴¹⁾と前に送った書簡の内容とは対照的で寛いだ、そして、やや高揚している上に諧謔というより悪戯じみた文言を用い、喜びを発散していることがうかがえる。いうまでもなく、この時点ではまだ異常性は見られない。

夏目の異常性の徴候を神経衰弱の徴候として千谷が指摘するのは、明治三十四年七月一日に記された日記の内容に「近頃非常ニ不愉快ナリクダラヌ事ガ気ニカヽル神経病カト怪マレ、然一方デハ非常ニゾーゾー敷處ガアル、妙ダ」⁴²⁾と、あることである。この時期の夏目の書簡を見る限りでは異常性の徴候と見るべきものは見出せない。しかし、客観的事実としては、六月十九日に文部省から、学術研究の旅行報告を確かにするようにとの手紙を受け取っている⁴³⁾。学術研究の報告は留学生の義務である。その義務を怠る結果になっている事実があつてのいわば公の督促状を受けたわけである。この事態は通常の夏目には起り得ないことである。物事を進めて行く上での手続きや姿勢に厳格さを求める夏目は、自己に対しても厳格である。そのことから、この事実には夏目に異常な事態が起こり始めていると見ることはできよう。そのように考えると、九月十二日付で寺田寅彦に送った書簡に「学問をやるようならコスモポリタンのものに限り候英文学なんかは椽の下の方持日本へ帰つても英吉利に居つてもあたまの上がる瀬は無之候」⁴⁴⁾と書いたのは、コスモポリタンのものである自然科学（物理学）を専攻する寺田に対して自己の究めようとする英文学の性質がコスモポリタンのものでなく、そのような英文学を専攻する立脚地は何か模索し、苦しんでいたことを証明するものと考えられる。つまり、夏目は文部省への報告義務を怠ったというより、報告すべき成果が上がっていなかったから、報告できなかった、それ程の苦悩の中にあつたということではあるまいか。

翌明治三十五年九月、この時点で夏目は神経衰弱を自認している。九月十二日付で鏡子に送った書簡に「近頃は神経衰弱にて気分勝れず甚だ困り居候然し大した事は無之候えは御安神可被下候」⁴⁵⁾とあることからそれは確認できる。

しかし、気分が勝れず大変困っているといいながら、大したことはないのご安心下さい、と言っているのは一種の矛盾をおかしていることになるが、そういう状況にあつても妻の心配を排除しようとの意志が働いていると考えれば、単なる矛盾とは片付けられない。

十月に入って夏目にとって重大な事態が発生する。しかし、このばあいは間接的に影響を与えるものであつた。荒正人によれば、十月十日頃、藤代禎輔は、文部省から岡倉由三郎を通じ、「夏目精神に異常あり、藤代へ保護帰朝すべき旨伝達すべし」との電報により依頼を受けるといふ事態が発生した⁴⁶⁾。これは夏目にとっては重大な事態であるが、夏目自身はこの時点ではこのことを知らされていず、藤代の賢明な判断で保護帰朝という事態にはならなかつた。このことからうかがえることは、夏目に対する他者の印象評価は、この時期大きく分かれることが起り得る状況にあつたということである。

夏目がアルバイト埠頭より日本郵船の博多丸に乗船し、ロンドンを離れたのは十二月五日であつた。藤代禎輔は2便前にロンドンを発っている。そして、翌明治三十六年一月二十三日神戸に上陸する。神戸到着との夏目が発信した電報を受けて鏡子は父と共に国府津で出迎える⁴⁷⁾。

■ 帰朝後における夏目の異常

夏目の異常は鏡子の回想によれば帰朝して数日目に見られ、長女の筆子が火鉢の向う側に坐っている時、火鉢の縁に五厘銭が乗っているのを見た夏目は「こいついやな真似をするとか何かというかと思うと、

いきなりぴしゃりとなく⁴⁸⁾るという不可解な行動をとったという。驚いた鏡子はその理由をたずねると留学中のロンドンの街中で乞食に銅貨を1枚渡したところ、帰った下宿の便所の窓に1枚の銅貨が乗っていたのを下宿の主婦による自分への当て付けと考え憤慨したことを想起したという、理解に苦しむ理由であったという⁴⁹⁾。

仮の住居であった中根宅から三月三日に本郷区千駄木町五十七番地に転居する。勤務校である第五高等学校には復帰せず、いわば強引に退職する⁵⁰⁾。友人達の尽力により、四月十日、第一高等学校英語嘱託の辞令を受ける。1週20時間で年俸700円である。四月十五日、東京帝国大学文科大学講師の辞令を受ける。年俸は800円である。帰朝して間もない夏目であったが、第五高等学校を自分の意思で辞職し、経済的にも全く余裕のないこの時期の夏目に余裕はなかった。大学の講義は辞令を受けた10日後の四月二十日に始めている。彼が担当する科目は、月曜、火曜、木曜であったから相当な負担を感じたはずである。それは、能力的な問題ではなく、神経的、体力的なものであったであろうことが推測される。

第一高等学校に出講したのは五月十三日である。この日受講生であった藤村操が夏目の指名に対しやって来なかったと答えたことに激しい応答があった。1週間後の五月二十日、前日も指名した藤村に再び指名すると、又しても予習をして来なかった藤村に対して夏目は「勉強する気がないなら、もう此教室に来なくてよい」⁵¹⁾といい渡す。このことがあって間もない五月二十二日、藤村は日光の華厳の滝に投身自殺をする。その際、滝口近くの樹肌に「巖頭之感」⁵²⁾と題する人生の意義を問う哲学的内容の一文が刻まれていたこともあり、大きな話題になる。時日が接近していたため、授業中における自身が行った他学生の前での叱責が原因ではないかと夏目は以後このことについて苦闘する。藤村の自殺が報じられる前日の五月二十一日に夏目は菅虎雄に宛てて「小生は存外閑暇にて学校へ出て駄弁を弄し居候大学の講義わからぬ由にて大分不評判…中略…第一高は遙かにのんきに候」⁵³⁾と書き送っていることから察して、大学の講義が不人気であることを気にしていたことは認められても、一高の方は「のんき」に勤めていたことがうかがえる。その直後に起きた学生の自殺であったから衝撃の大きさは想像を越えるものがあつたに違いない。留学中から持続していた夏目の精神の不安定が筆子への理不尽な暴力としてあらわれ、ここで又、授業という公的な場において行った自己の行為が学生の自殺を呼び込んだと考えたとすると外面的、内面的の両面において当時夏目が置かれていた精神状態の危うさが想像される。

鏡子によれば「六月の梅雨期頃からぐんぐん頭が悪くなって、七月に入ってはますます悪くなる一方です。」⁵⁴⁾という状態であった。ますます悪化する夏目の状態に鏡子は、「どうにも手をつけられません。」⁵⁵⁾と、いわゆる処置なしの状況に至るまで事態は切迫していたことを回想する。当時鏡子は三女の栄子を妊娠中であった上に悪阻が激しく、更に肋膜にも異常が見られるという時期であったこともあり、夏目の症状を専門医に見せるなどして対処法を考える。夏目は鏡子に対して里へ帰れと言ひ募るようになる。「しきりに里へ帰れと言うのに逆って、頭をいらいらさせた上で、万一子供に危害でも加えられては取りかえしがつかないと先々のことも考え、一時鎮まるまで先づ身を引こうというので鏡子は里へかえる。」⁵⁶⁾ということに決まったのは、七月十日で、鏡子が夏目の許に帰ったのは九月十日であった。職場の方では大学が七月十一日より夏期休業に入ったこともあり、夏目に大きな変化はない。しかし、私生活上は依然として苦悩する夏目の心境がうかがわれ、九月十四日、菅寅雄に宛てた書簡に、「小生不相変神経衰弱意気消沈と申す次第に御座候」⁵⁷⁾と書き送っている。九月二十二日、大学で行った講義（『マクベス』）の聴講学生は大教室を満たす程であった。講義をする夏目、すなわち公人としての夏目は、卓越した教師としての姿を見せていたというべきであろう。

しかし、私生活の方では、夏目の異常性は終息しているわけではなかった。夏目の子どもの側の視点から書かれたものとして、夏目の孫（筆の娘）に当たる半藤末利子によれば、「ロンドンから帰国し千駄木に住んでいた頃の漱石は、最も精神的に不安定な時期であった。中略。鏡子や幼い2人の娘達にはしばしば狂気の沙汰を演じた。」⁵⁸⁾という。半藤の記述内容は言うまでもなく母鏡子の回想を源としているものではあるが、身内でしか知り得ないこの時期の夏目の状況を伝えるものとして重要な意味を持つ。

九月十日に鏡子が戻り一時期平穏を取り戻した夏目の家庭も、十一月に入り、夏目の精神状態は悪化し、ついに鏡子との離縁を口にするようになる。十一月三日、三女栄子が誕生。娘の誕生は夏目の状況を変える力にはならず、ついに鏡子側に立つ者の中にも離縁を支持する者も出る程になるが、鏡子は「なる

程私一人が実家へ帰えたら、私一人はそれで安心かもしれません。しかし子供や主人はどうなるのです。病気ときまれば、傍に居って及ばずながら看護をするのが妻の役目ではありませんか。』⁵⁹⁾ と言って離縁を拒否し、離縁話は終息する。この後も夏目の異常行動は続くが、それを伝える筆子の夫松岡譲は、異常行動の原因を夏目のみに求めることはしない。松岡はいう、「精神病か神経衰弱か、そのいずれかを断定する力は私にはない。たゞこの奇怪な心理と振舞いとに拘らず、それに敗かされる事なしに、自分を發揮して有終の美を成し遂げた彼の底力を祝福するばかりだ。』⁶⁰⁾ と書き加えている。松岡のこの見方は客観的立場に立つとも読みとれるが、彼自身は夏目の門下生でもあったから、夏目側に立つ見方とも言え、その意味では主観的立場の性格も持つ。孫の半藤の見方は明確に主観的立場を示している。

事実として見られた夏目の異常行動は、強度において変化はあったとしても、明治三十六年が終わる時点でも終息を見ることはなかった。

■ 結 言

本論考によって明らかにし得たのは、次の点である。まず、夏目の神経系統の病歴について、その始点を探り、それがどのような経過を経て推移したかを明治三十六年の年末までに限定して明らかにした。しかし、神経系統の病気という性質上、それが満足のいく程度にまでなし得たというには十分でないことを自覚している。

次に、夏目の病歴が彼の生活や周辺にある他者の生活に如何なる影響を与えたかについて明らかにした。これについては、夏目の神経系統の病歴が明らかになることにより、それに連動するものとして明らかになるという性質があるので、単独にそれのみをとりあげて明らかにすることが困難であることを痛感させられた。今回、論考を明治三十六年末までに限定したので、この論題による探究は未だ終了しないため、今後も論考は継続することになる。

注

- 1) 夏目鏡子, 松岡譲 筆録, 漱石の思い出 後篇, 角川書店, 昭和36年, 182ページ。
- 2) 同前書, 173ページ。
- 3) 立川昭二, 病いの人間史, 明治・大正・昭和, 新潮社, 1990年, 154ページ。
- 4) 千谷七郎, 漱石の病跡, 病気と作品から, 勁草書房, 1967年, 25ページ。
- 5) 桶谷秀昭, 夏目漱石論, 河出書房新社, 昭和53年, 7ページ。
- 6) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集 第27巻所収, 岩波書店, 1980年, 17~18ページ。
- 7) 同前書, 18ページ。
- 8) 千谷七郎, 前掲書, 25ページ。
- 9) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 54ページ。
- 10) 松岡譲, 漱石・人とその文学, 潮文閣, 昭和17年, 91ページ。
- 11) 生没年不詳。今北洪川に居士として参禅, 後に出家, 宗演の法嗣となる。
- 12) 安政6年(1859) - 大正8年(1919), 福井県出身, 明治25年, 円覚寺管長就任。
- 13) 荒正人, 増補改訂漱石研究年表, 集英社, 1984年, 58ページ。
- 14) 石川悌二, 夏目漱石 - その実像と虚像 明治書院, 昭和53年, 93ページ。
- 15) 夏目漱石, 書簡, 前掲全集 第27巻, 57ページ。
- 16) 加藤二郎, 漱石と禅, 翰林書房, 1999年, 216ページ。
- 17) 小宮豊隆, 夏目漱石, 岩波書店, 昭和24年, 242~243ページ。
- 18) 夏目漱石, 私の個人主義, 漱石全集 第21巻所収, 岩波書店, 1979年, 138ページ。
- 19) 同前書, 13ページ。
- 20) 荒正人, 夏目漱石, 5月書房, 昭和32年, 26ページ。
- 21) 同前書, 27ページ。

- 22) 同前書, 27ページ。
- 23) 夏目鏡子, 松岡譲 筆録, 漱石の思い出 前篇, 角川書店, 昭和35年, 23ページ。
- 24) 江藤淳, 夏目漱石, 講談社, 1968年, 229ページ。
- 25) 夏目鏡子, 松岡譲 筆録, 漱石の思い出 前篇 (前掲書), 30ページ。
- 26) 同前書, 49ページ。
- 27) 小林 惟司, 寺田寅彦の生涯, 東京図書, 1977年, 175～201ページ。
- 28) 荒正人, 増補改訂漱石研究年表 (前掲書)。211ページ。
- 29) 小宮豊隆, 夏目漱石 (前掲書), 336ページ。
- 30) 夏目鏡子, 松岡譲 筆録, 漱石の思い出 前篇 (前掲書), 72ページ。
- 31) 同前書, 74ページ。
- 32) 夏目漱石, 二百十日, 漱石全集 第4巻所収, 岩波書店, 1979年, 131～183ページ。
- 33) 江藤淳, 漱石とその時代 第2部, 新潮社, 昭和45年, 41～42ページ。
- 34) 夏目鏡子, 松岡譲 筆録, 漱石の思い出 前篇 (前掲書), 87ページ。
- 35) 江藤淳, 漱石とその時代第2部 (前掲書), 86ページ。
- 36) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第27巻 (前掲書) 所収, 127ページ。
- 37) 同前書, 130ページ。
- 38) 同前書, 130ページ。
- 39) 同前書, 147ページ。
- 40) 同前書, 149ページ。
- 41) 同前書, 152ページ。
- 42) 夏目漱石, 日記, 漱石全集 第24巻所収, 岩波書店, 1979年, 55ページ。
- 43) 荒正人, 増補改訂漱石研究年表 (前掲書), 296ページ。
- 44) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集 第27巻 (前掲書) 所収, 156ページ。
- 45) 同前書, 175ページ。
- 46) 荒正人, 増補改訂漱石研究年表 (前掲書), 320ページ。
- 47) 夏目鏡子, 松岡譲 筆録, 漱石の思い出 前篇 (前掲書), 102ページ。
- 48) 同前書, 103ページ。
- 49) 同前書, 103ページ。
- 50) 江藤淳, 漱石とその時代 第2部 (前掲書), 232～233ページ。
- 51) 野上豊次郎, 大学教授時代 其2, 春陽堂, 大正10年, 67ページ。
- 52) 荒正人, 増補改訂漱石研究年表 (前掲書), 334ページに全文掲載。
- 53) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集 第27巻 (前掲書) 所収, 185ページ。
- 54) 夏目鏡子, 松岡譲 筆録, 漱石の思い出 前篇 (前掲書), 108～109ページ。
- 55) 同前書, 108ページ。
- 56) 松岡譲, 漱石・人とその文学 (前掲書), 166ページ。
- 57) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集 第27巻 (前掲書) 所収, 193ページ。
- 58) 半藤末利子, 漱石の長襦袢, 文芸春秋, 2009年, 24ページ。
- 59) 松岡譲, 漱石・人とその文学 (前掲書), 168ページ。
- 60) 同前書, 179ページ。

追記 引用文中の旧漢字, 旧仮名は書名を除き新漢字, 新仮名に改めたことをことわっておきたい。